# 早稲田大学インクルーシブ教育学会ニュースレター

2018 年（平成 30 年度）・NO.4

## 第 2 回研修会

「UDL 学びのユニバーサルデザイン実践ワークショップ」

ニューヨーク州スクールサイコロジスト

亀山　静子　先生

2018 年 7 月 15 日（日）
早稲田大学 16 号館 306 号室

子どもが自分に合った学び方を自分で選び、自分で自分を成長させる力を養う UDL について、その良さをアメリカの実践例を交え、バーンズ先生よりご講義いただきました。参加者の皆さんと、それぞれの教育現場での UDL の取り組みや課題を話し合うことも出来ました。

### 「UDL 学びのユニバーサルデザイン実践ワークショップ」～クラス全員の学びを変える授業アプローチ～

「誰もが学習へのアクセスを持てるようになり、学習の主体である子ども自身が、自分の学びに必要なものを理解して使い、自己モニターしながら学びの舵取りができるよう成熟させていくための概念フレームワーク」である UDL について研修しました。

講義では、①カリキュラムは、・教材、方法、手段、評価、ゴールまでを見通して考える。・学ぶことを明確に柔軟な形で示す。・学習後にどうなっているかイメージできる。・測定可能か？(形成的、総括的評価)・一定に時間内に達成可能か。「教師のすること」のシナリオになっていないか について考えられているか見直す必要がある。②教材設定では、・学習者の多様性に対応しているか。・意図しないバリアはないか。・バリアを取り除くオプションがあるかがポイントである。③評価では、・多様性に対応した柔軟なものか。・測定しようとしているものを測定しているか。信頼性があるか。・評価方法を子どもが知っている。・セルフモニタリングできる。・誤りを直す機会があるかも大切な視点である。などについて教えていただきました。

アメリカでの実践事例として、学習者がその日のコンディションや学習形態に合わせて座席や椅子を選択している様子や、かけ算の学習で、九九の答えを床に貼り、見つけた答えを踏む「けんけんゲーム」など、学習者自身が主体的に関わり楽しんで定着を図っている様子、また、「私は、足し算と引き算が入った文章題を解くことができる。」のように、今日の学習のゴールを明確に して、見えるように提示していることも紹介していただきました。

「学習教材にはどのようなバリアがあり、それに対してどのようなオプションで対応するか」をテーマに参加者同士で意見交換をしました。自分だけでは気づけなかったバリアや、対応策を見出すことができました。自分の意識を変えたり、新しい発想に触れる有意義な時間となりました。

### 参加者の皆さんのアンケートより

〇今までの自分の考え、価値観のかたさや狭さを実感しました。子ども達が学びたいと思う教材を工夫したり、選択肢を与えたりと実践に生かしていきたいと思います。
〇主体は 学習者であると改めて意識することができました。その子にとって良かれと用意したものが余計なお世話だったり、足りなかったり。本人にもっと聞いて、本人が自分に合った学び方を知ることが大切だと分かりました。UDL について、アメリカの実践を拝見しつつ、ペアワークで意見交換をしながら主体的に学べたような気がします。
〇UDL について再認識できた。様々な場面でバリアができてしまうことが分かり、視点を変える必要があった。